

平安京にも羅城があった

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

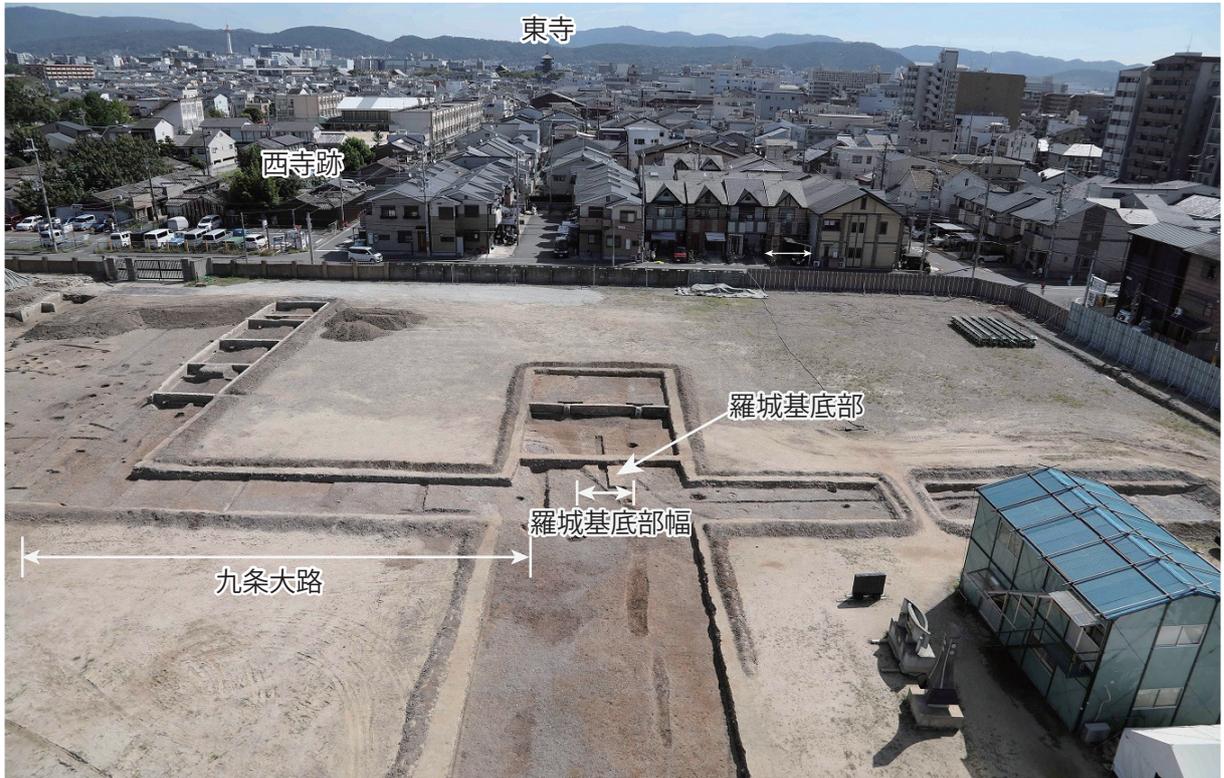


写真1 平安京羅城・九条大路の発掘調査全景（西から）

羅城とは 都城の周囲を囲む城壁のことをいいます。中国では外敵の侵入を防ぐため、明・清の時代に至るまで堅固な羅城が築かれていました。しかし、外敵のない日本の都城では、都城の四周を巡らす本格的な羅城は造られなかったと考えられています。それでは平安京ではどのような羅城が築かれていたのでしょうか。

史料に記された羅城 羅城と不可分の関係にある羅城門は、発掘調査では確認されたことはありません。しかし『日本紀略』弘仁7年(816)8月に大風によって倒壊した記録があるので、平安京の造営当初

から羅城門の造営は進められていたと考えられます。その両脇にとりつく羅城もほぼ同時並行で築造されたのでしょうか。

平安時代中期に編まれた法令集『延喜式』には、平安京の道の規模や構造などについて詳しく記されています。左右京職京程条には、「南極大路(九条大路)十二丈、羅城外二丈<垣基半三尺。犬行七尺。溝廣一丈>路廣十丈」とあり、羅城の記載があります。羅城は九条大路に接しており、その羅城の基底部が幅6尺(1.8m)で、羅城の外側には幅7尺(2.1m)の犬走と、幅1丈(3m)の溝が存在したこと

が分かります。

羅城の高さに関する記載はありませんが、『延喜式』木工寮の築垣条には、基底幅6尺の築地の高さは、1丈3尺(3.9m)と記されています。このことから、羅城も、京内に施工された大路の築地塀と同じ高さで、羅城を特段に高く造ったわけではなかったようです。

羅城の基底部を発見 2018・2019年度に京都市南区の京都市立開建高等学校(洛陽工業高等学校跡)の建設工事に先立って発掘調査が行われました。この場所は平安京右京九条二坊四町・九条大路跡に当たり、東側には西大宮大路を